京都観光の回復と訪日客

今春は、京都市の観光地が久しぶりににぎわいを取り戻した。新型コロナウイルス感染症の重症者が大幅に減り、行政が行動制限を緩和したため、嵐山や祇園などに多くの観光客が訪れた。京都でコロナ対応の行動制限がないゴールデンウイークはじつに３年ぶりだった。ただ、外国人観光客の入国規制が続いていたため、コロナ禍前の好況にはほど遠く、京都の観光業界にとっては不安を抱えながらの再出発となった。

市観光協会の集計によると、４月の主要ホテル１０８施設の客室稼働率は４７・１％となり、前年同月比で２６・１ポイントも上昇したが、昨秋には及ばず、コロナ禍前の２０１９年４月との比較では４２・８ポイントも低かった。４月の日本人延べ宿泊数は前年同月比で１５９・８％増、１９年４月比でも６２・５％増と好調だったことから、４月の客室稼働率が伸び悩んだのは、外国人客の影響が大きかったことが分かる。インバウンドの受け入れが６月１０日から段階的に再開されたが、京都の観光業界からは早期の全面受け入れを求める声も出ている。

コロナ禍は欧米でほぼ収束し、中国上海市もロックダウン（都市封鎖）を解除した。さらに為替が大幅な円安に振れていることから、海外では日本への旅行需要が膨らんでいるとみられる。世界経済フォーラムが５月に発表した旅行・観光開発ランキングで日本が初めて首位になったことも追い風になる。

京都の宿泊施設が外国人客を待ち望む背景には、厳しい経営状況がある。多くが赤字運営に陥っているとみられ、６月１日には中京区のホテル運営会社が破産申請する方針を決めたことが明らかになった。推計では、３月末までの２年間で市内の宿泊施設のうちゲストハウスなど１千軒余りが廃業などですでに姿を消した。
ポストコロナに向け、真価が問われる京都の観光業界。７月の祇園祭で３年ぶりに復活する山鉾巡行が次の試金石となりそうだ。

京都新聞社　報道部政治経済担当部長・論説委員　猪口　健司

清水寺前を散策する修学旅行生や家族連れ（５月８日、京都市東山区）

観光客でにぎわう清水坂（５月８日、京都市東山区）